

日用品の価値を表層だけで捉えるな

Don't take everyday objects at face value

<http://www.japantimes.co.jp/culture/2015/06/30/arts/dont-take-everyday-objects-face-value/>



'Artificial view_botanical_7' | © ATSUSHI OKABE, COURTESY KANA KAWANISHI GALLERY

岡部淳史の卒業制作はルービックキューブと抽象表現を用いた実験である。その結果生まれた作品は生々しく、色彩豊かであり、目を楽ませる。岡部はシャッターを開いたままレンズをズームさせることで、格子状のイメージを作り出し、それらのイメージは鑑賞者から幾何学的、また超自然的な空間に飛び込んでいるように見える。これはクリストファー・ノーランの『インターステラー』やヴィクトル・ヴァザルリのオブ・アートに見られる四次元立方体に似ているとも言える。

ギャラリーオーナーの河西香奈はこれらの作品を初めて見た時、規則正しく並んだ模様以上のものを作品から見出し、彼女自身が感じたことは説明し難い感覚であると気づいたという。KANA KAWANISHI GALLERYに展示された岡部の『faces』は新作における実験の産物であり、それらはルービックキューブの作品よりもシンプル、また視覚的に魅惑的な要素は少ないが、より混沌としている。

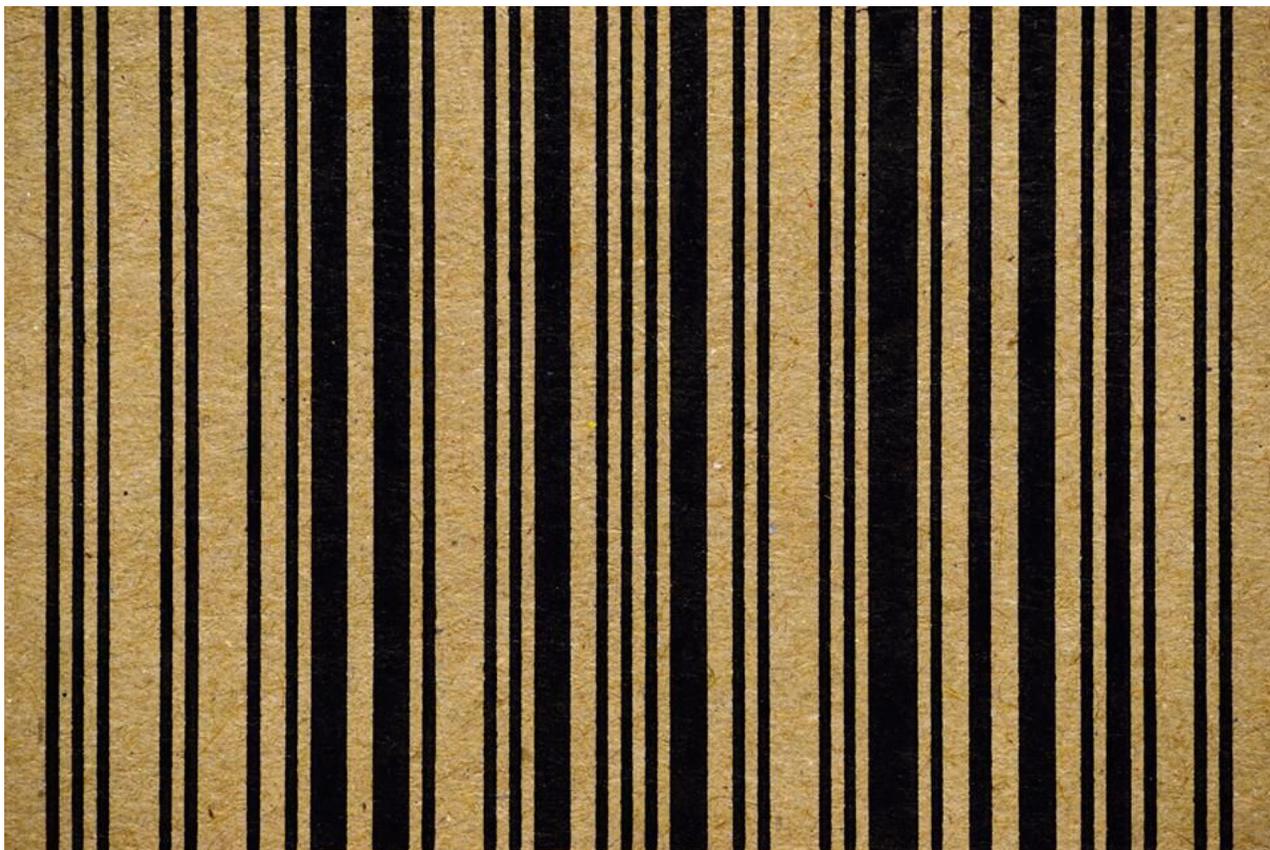
岡部は日常にある物体や素材を作品に用いて、不可解かつ奇妙な表面として—スケールに操作を加えたり、均一な構成に調整を加えることを通して—写真に収める。作品の背後にある意図にはプラトンのアイデア論の要素を感じさせる。人間の周りにあるすべてのものが一種の輪郭や形状の調和であり、それは機能性や文化的な関

連性を排除した時に感知できるものだという考えを岡部は持ち、その考えを広めたいという欲求によって彼は作品を作っている。

ある作品では、段ボール箱の上面を写しており — 奇抜であり、作品の洗練されていない物体そのままの見た目に、人によっては怒りを覚える人もいるかも知れない — 奥行きがないことを除いて、被写体そのものと区別つかないこの二次元作品は、その挑発に乗ることで、作品のもたらず幻覚を楽しむこともできるかも知れない。その他の作品は、日本の封筒にある郵便番号を書く赤い四角をとてつもなく大きく拡大したイメージ。最初は何が写っているのか認識できず、バックの茶色のマニラ紙は洞窟に描かれた現代的な壁画のような印象を与え、または、宇宙人によってトウモロコシ畑に描かれた空想の模様のようにも思える。

ギャラリーに平凡な物体を置くことでそれら物体のステータスを昇華させるという行為は今や100年近くに渡って怒りを巻き起こしてきた。反論の内容は大きくは変わらないが、芸術家たちの意図はとてつもなく変化している。確かに、懐疑的にゴミの塊と呼ばれるようなものには不釣り合いな札の塊を手に入れるために用いられてはきたが、それに加え、私たちの美の概念を豊かにする上で重要であった。

現在の問題は、今度はそのような芸術が何か正統派のようなものになってしまっていることだと言えるだろう。アートと日常生活を分けるということにおいてヨーロッパやアメリカの文化より歴史の浅い日本では特にそうであろう。とはいえ、その表面の裏側に風変わりで魅力的な奥行きを持つ『faces』は、確実に、その作品独特の魔力を持っている。 【2015年6月30日・The Japan Times紙アート面／文：John L. Tran】



'faces_barcode_01' | © ATSUSHI OKABE, COURTESY KANA KAWANISHI GALLERY